

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 4月27日現在

機関番号：37116

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20390549

研究課題名（和文） 在日外国人に対する看護の現状と諸外国における状況との比較

研究課題名（英文） Current Status of Nursing to Foreign People in Japan and Comparison with Situation of Foreign Countries

研究代表者

川口 貞親（KAWAGUCHI YOSHICHIKA）

産業医科大学・産業保健学部・教授

研究者番号：00295776

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、全国の医療機関、保健センターを対象として、外国人に対する看護、支援の現状を明らかにすることである。外国人入院患者を受け入れたことのある病院のうち、80.8%の病院が「外国人患者への看護を行って困ることがあった」と回答した。救急指定病院において、外国人の救急外来患者を受け入れて、看護で困ったことがあると回答した病院は86.6%であった。市町村における保健師の外国人に対する保健活動の現状調査では、外国人への対応・支援を経験している保健師のうち、90.3%の者が外国人への支援について困難さを感じていた。今後は医療や保健活動の現場に外国語に堪能な者を配置したり、各国の文化、生活習慣、医療の状況について学べるような研修会を開催するなど、外国人の背景を理解し、その外国人に必要な看護を適切に提供できるような対策が必要であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the present state of nursing care provided to foreign people living in Japan with medical institutes across Japan and nursing professionals working in health care centers as subjects. In this study using medical institutes as subjects, we investigated the nursing care provided to foreign patients and nursing care provided to foreign emergency outpatients. Among the hospitals that have taken in foreign patients, 80.8% of hospitals replied that “there were problems in nursing foreign patients,” and as the reason thereof, the difficulty regarding the mental support of patients due to foreign languages, with regard to comprehending the level of understanding of the patient, reducing anxiety, etc., was raised. Regarding difficulties in nursing care situations, support of eating habits was raised, and it was replied that connecting with patients was difficult due to religious and cultural backgrounds such as religious dietary restrictions, understanding of hospital food, differences in food culture after child birth, etc. In hospitals with designated emergency wards, 86.6% of the hospitals replied that they have taken in foreign emergency outpatients and had difficulties in nursing. Upon a study of the present status regarding health services provided to foreign patients by public health nurses in municipalities, among public health nurses that have experienced dealing with and supporting foreign patients, 90.3% of them experienced difficulty in supporting foreign patients. Regarding the reasons for this, language differences were the most common, along with differences in lifestyle, financial issues, and differences in approaches to health and diseases. Overall, it was believed that it is necessary to understand the patients’ background and take measures so that nursing care necessary for foreign patients may be provided for such patients by placing a person fluent in the foreign language in the clinical or health service situations, holding workshops for learning the cultures, lifestyles, and medical care of each country, etc.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
総計	5,800,000	1,740,000	7,540,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護政策・行政

1. 研究開始当初の背景

大規模の自然災害や移民・難民問題をひとつの契機として、わが国においても看護学の国際性が問われている。日本において、机上の事柄としてではなく、実践をともなう国際看護学、異文化間看護学たる学問分野が確立出来るかである。わが国における報告事例をみても、在日外国人が医療機関への受診にいたるまでの受療行動の特性や受診を阻害する要因などについての報告はみられるものの、受診以降の問題に触れているものはあまりなく、ましてや看護という視点に立った報告は見受けられない。また、ある限定された地域、例えば多くの外国人が在住している地域で、実際の診療場面における困難例や医療スタッフの取り組み例について若干の報告が見受けられるが、医療機関や保健所の現場で、在日外国人に対して看護援助が行われる際に困った事柄、その現状や問題点に関する全国規模の調査例は残念ながら見当たらない。特に、外国人看護師の本格的な導入を目指しているわが国にとって、在日外国人に対する看護の現状を把握し、問題点を改善していくことは避けられないことであり、早急な対策が必要である。

我々は今までに関西や九州に在住する外国人（ベトナム難民やフィリピン人）を中心に、生活状況をはじめ受領行動に関する調査を実施し、彼らの支援に努めてきた。神戸近郊のベトナム難民が多く暮らすコミュニティにおいて、アジア福祉教育財団難民事業本部、NPO 団体らと協力しながら、毎週日曜日の教会のミサの時間にあわせて、「健康相談教室」を開催し、心身に関する直接的な相談に対応するとともに、生活全般に関する支援も行っている。受領行動については、文化や言語の壁が原因となり、円滑に問題解決できないケースも少なくない。その傾向は身体的

疾患に罹患した時よりも、精神的な失調をきたした時の方が困難さが増す傾向にある。本研究メンバーの数名は、全国的な組織である「多文化社会における精神保健福祉的支援に関する研究班」（代表：野田文隆（大正大学））にも随時参画しており、医療や生活支援の面から、在日外国人が日本人とともに、よりよく暮らせる社会の実現を目指している。特に、外国人看護師の本格的な導入を目指しているわが国にとって、在日外国人に対する看護の現状を把握し、問題点を改善していくことは避けられないことである。

2. 研究の目的

近年、以前よりもまして国際看護の必要性が叫ばれるようになってきた。わが国では発展途上国を中心とし、保健医療福祉に関するさまざまな国際協力活動が実践され、国際的貢献を果たしている。その功績は国際的にも評価を受けており、海外に向けての援助は成果をあげていると言ってよい。

しかしながら、国内での在日外国人を対象とした医療に目を向けてみると、はたして十分満足のいく医療を提供できているのであろうか？医師レベルの診断、治療行為については、国際的な診断基準や治療方法が明確にされており、実際の医療現場での国際的な学术交流も盛んに行われているため、医療の普遍性はある程度保たれていると言えよう。では看護についてはどうであろうか？文化の壁や言葉の障害を乗り越えて、普遍的な充実した看護を提供できているのであろうか？これに近い領域の研究として、在日外国人の受診行動に関する研究、外国人が多い地域での母子保健に関する研究がみられる。受診以降の医療に関する問題について、植本が積極的な提言を行っているが、この領域の研究は散見する程度しかない。看護という視点に立つ

た報告としては、実際の診療場面における困難例や医療スタッフの取り組み例について若干の報告が見受けられる。ある限定された地域、例えば多くの外国人が在住している地域での報告例である。在日外国人に対する看護の調査例として、長谷川らの報告があるが、ある特定の地域に限定されるものであり、また困難例についての具体的な報告としては不十分である。医療機関や保健所の現場で、在日外国人に対して看護援助が行われる際に困った事柄、その現状や問題点に関する全国規模の調査例は残念ながら見当たらない。

以上のような状況に鑑み、本研究では全国の医療機関、保健所（市町村保健センターを含む）を対象として、まず在日外国人に対する看護の現状を把握する。実際の現場で体験された困難な事例、その具体的な状況および看護としての対応策、その事例を通して考えられる今後の課題などについて、質問紙により調査を実施する。なぜ困難な事例として解釈されるにいたったのか、単なる言葉による意思疎通が難しかったためか、それとも彼ら 在日外国人の生活のあり様や文化を考慮した上での看護計画作成や看護実践に問題があったのか、これらの点に関して今後改善されるべき事柄（看護としての対応策を含めて）にはどのようなものがあると考えられるのかなどについて調査を実施する。在日外国人に対する看護の現状と詳細な問題点について把握する。加えて、諸外国との比較を通して、わが国の現状を再考する。

3. 研究の方法

本研究では全国の医療機関、保健所（保健センター含む）に勤務する看護職を対象として、自記式質問紙を用いて、外国人に対する看護・支援の現状調査を実施した。産業医科大学倫理委員会の承認を得た上で調査を実施した。

（1）医療機関への調査

①外国人入院患者への看護に関する現状調査

外国人入院患者への看護の現状を明らかにするために、郵送報による調査を行った。調査期間は平成 21 年 12 月～平成 22 年 3 月である。主な内容は、外国人入院患者の受け入れの有無、外国人入院患者を看護する際の困難度、困難時の援助場面、困難時の対応、外国人入院患者への看護を行うにあたっての対策等の意見、などである。病院要覧 2003-2004 年版(医学書院)から抽出した 3100 病院の看護部長（総看護師長）宛てに一斉配布した（医療機関の統廃合等により実際の配布数は 2999 部）。調査にあたっては、患者・利用者のデータを医療機関等の職員を通してデータ収集することから、個人情報保護法

に従い、患者や調査協力者（回答者）の氏名や病院名が特定されないことがないよう、守秘義務を遵守した。調査は強制ではなく対象者の善意としての協力によるものであり、調査協力が得られない場合に一切不利益を被らないことなどの倫理面に関する内容を質問紙に同封し説明を行った。調査に関しての問合せ先（産業医科大学産業保健学部）と対応する研究代表者名を必ず明記した。

②外国人救急外来受診患者への看護に関する現状調査

外国人救急外来受診患者への看護の現状を明らかにするために、郵送報による調査を行った。①の外国人入院患者への看護に関する現状調査と同時期に実施した。救急指定病院として登録されている全国の 386 病院の救急外来担当部門師長宛てに質問紙を郵送した。質問紙の内容や調査方法は①の外国人入院患者への看護に関する現状調査に準じた。

（2）市区町村における保健師の外国人に対する保健活動の現状調査

住民への直接的な保健福祉サービスを担う市町村保健センターにおける在日外国人への保健福祉活動の現状を把握することを目的として、全国の市町村保健センター保健師を対象として郵送報による質問紙調査を実施した。平成 21 年度版在留外国人統計（入管協会）の第 8 表「国籍（出身地）別市・区別外国人登録者」で在留外国人登録がある市区保健センター保健師が対象である。調査は平成 22 年 9～10 月にかけて実施し、1008 市区町村に 3507 部の質問紙を配布した。倫理的配慮は①の外国人入院患者への看護に関する現状調査に準じた。

4. 研究成果

（1）医療機関への調査

①外国人入院患者への看護に関する現状調査

552 病院からの回答が得られ、回収率は 18.4%であった。3 年間で入院した外国人患者は約 10100 人であった。過去 3 年間において、385 病院（69.8%）が 1 名以上の外国人入院患者を受け入れており、多い病院では 1000 人を超える外国人入院患者を受け入れている病院もあった。外国人を受け入れたことがある 385 病院のうち、外国人入院患者への看護で困ることがあると回答したのは 311 病院（80.8%）にのぼった。言語の違いにより困ることとして、「患者の理解度の把握」341 病院（88.6%）、「不安の軽減などの精神的ケア」328 病院（85.2%）、「インフォームドコンセント等の説明」327 病院（84.9%）、「入院時のアナムネ聴取」316 病院（82.1%）、「コミュニケーションに要する時間」304 病

院 (79.0%)、「日々の病状の確認」300 病院 (77.9%)、「看護師の精神的負担」271 病院 (70.4%) があった。他に困ることとして、文化や生活習慣が異なること、病気に関する考え方の違うことなどがあった。日常生活への看護援助場面での困難について、137 病院 (35.6%) が食生活を挙げ最も多かった。次いで、陰部洗浄 89 病院 (23.1%)、膀胱留置カテーテル 78 病院 (20.3%)、入浴介助 74 病院 (19.2%)、清拭 71 病院 (18.4%) であった。検査・治療場面における援助場面での困難については、内服薬を用いた検査 115 病院 (29.9%)、点滴を用いた検査 94 病院 (24.4%) であった。困った時の対応としては、院内のスタッフに相談するが最も多く、281 病院 (73.0%)、病院外への相談 192 病院 (49.9%) であった。相談している院内スタッフでは医師 211 病院 (47.3%) が最も多く、次いで看護師 154 病院 (34.2%) であった。病院外の相談先では、患者の親族 108 病院 (39.4%)、患者の関係者 (所属機関) 84 病院 (31.8%)、公的機関 35 病院 (12.8%) であった。困った時の対応策に関しては、332 病院 (86.2%) が効果があったと回答した。外国人入院患者の看護を行うにあたって、実施されている看護師の支援制度は、相談部署がある 53 病院 (13.8%)、対応可能な看護師の配置 8 病院 (2.1%)、看護師への研修制度 3 病院 (0.8%) にとどまった。外国人入院患者に対する看護を提供するための今後の対策については、326 病院 (84.7%) が対策が必要と回答した。具体策としては、院内に外国人に対応できる人を配置する 164 病院 (42.6%) が最も多く、次いで院外に相談できる窓口、機関を設置する 87 病院 (22.6%)、院内に外国人に対応できる部署を配置する 44 病院 (11.4%) であった。外国人入院患者の受け入れについては、受け入れる方が良い 56.0% に対して、受け入れない方が良い 27.5% であった。

調査結果から、多くの病院において、外国人入院患者への看護を困難と感じていることが明らかになった。対応しては、多くの看護師が個人的に相談することによって、何とか対応している現状がわかった。外国人入院患者に対応している看護師は、外国人への看護に消極的なのではなく、言葉の壁によるコミュニケーションが困難なために看護の提供で困っている現状が明らかになり、看護師と患者間をつなぐ何らかの役割が必要であると考えられた。看護師を支援する制度が必要なのか、あるいは看護師自身がコミュニケーションが取れるようにしていくべきなのかは検討が必要である。

②外国人救急外来受診患者への看護に関する現状調査

101 病院からの回答が得られ、回収率は 26.4% であった。3 年間で救急外来受診した外国人患者は延べ約 32000 人であった。過去 3 年間に於いて、97 病院 (96.0%) が 1 名以上の外国人外来患者を受け入れていた。外国人を受け入れたことがある 97 病院のうち、外国人患者への看護で困ることがあると回答したのは 84 病院 (86.6%) にのぼった。言語の違いにより困ることとして、「不安の軽減などの精神的ケア」86 病院 (88.7%)、「患者の理解度の把握」84 病院 (86.6%)、「インフォームドコンセント等の説明」83 病院 (85.5%)、「病状の確認」81 病院 (83.5%) があった。文化、生活習慣の違いや病気についての考え方の違いで困っていることも多かった。日常生活援助場面での困難は、膀胱留置カテーテルの挿入が 28 病院 (28.9%) と最も多く、次いで浣腸、導尿、陰部洗浄と排泄に関する援助を挙げる病院が多かった。検査・治療場面における援助場面での困難については、X線、CT など大きな機械を使用した検査が 38 病院 (39.2%) で最も多かった。困った時の対応としては、院内のスタッフに相談するが最も多く 84 病院 (86.6%) で、医師に相談している例が多かった。外国人救急外来患者への看護をするための支援制度は対応についての相談窓口の設置 15.8%、担当看護師の配置 3.0%、看護師の研修制度 3.0% であったのに対して、89.1% の病院が今後の対策が必要であると回答していた。救急外来における外国人患者の受け入れに関して、受け入れる方が良い 83.2% に対して、受け入れない方が良い 12.9% であった。

調査結果から、多くの救急指定病院において、外国人救急外来患者への看護を困難と感じていることが明らかになった。言葉や生活習慣の異なる外国人救急外来患者に、必要な看護を提供するための体制整備が必要であることが浮き彫りとなった。単施設で受け入れ体制を整備することは容易ではなく、行政や大学等の機関による組織的な支援が必要であると考えられた。

(2) 市区町村における保健師の外国人に対する保健活動の現状調査

1408 部の回答があり、回収率は 40.1% であった。外国人の支援経験の有無に記載のない回答などを除き、1367 部を有効回答とした。回答者である行政保健師の所属は、母子係が最も多く、次いで健康づくり、地域保健、高齢者、精神保健、介護保険の順であった。外国人への対応を経験している保健師は 1236 人 (90.4%) であった。対応場所・方法で最も多かったのは窓口で 1091 件、次いで家庭訪問 1051 件、電話 795 件であった。母子ケースの対応経験は 1196 人 (90.7%) で、健診フォローでの対応が最も多かった。援助内

容では発育・発達観察、育児指導、サービス利用支援、育児不安対応、産後の体調管理が多かった。成人ケースへの対応・支援経験は527件(40.1%)で、生活習慣病健診での対応が最も多かった。高齢者ケースへの対応経験は144人(11.1%)であった。要介護者に関する対応が最も多かった。全体として、外国人への支援を困難だと感じている保健師は1152人(87.3%)にのぼった。困難な理由は言葉の違いが最も多く、次いで生活習慣の違い、経済的問題、健康への考え方の違い、制度の違い、宗教、サービスが利用できないことの順に多かった。困難時の対処方法は、別のスタッフに相談するが936人(70.9%)と最も多く、内訳としては同僚保健師、先輩保健師、上司の順に多かった。施設外の方に相談するとの回答は277人(21.0%)で、内訳は公的機関、利用者の関係者(所属機関)、利用者の親族、民間機関の順に多かった。外国人の対応・支援を行うにあたっての今後の対策に関して、必要と回答した保健師は1218人(87.0%)で、必要ない103人(7.4%)を大きく上回った。具体的な対策は、施設内に外国語の堪能な部署を設置するが514人(36.7%)と最も多く、次いで施設外に相談できる窓口、機関を設置する、各課に外国語の堪能な職員を配置する、施設内に外国語の堪能な保健師を配置する、各課に外国語の堪能な保健師を配置するの順に多かった。

調査結果から、市町村保健センターでは多くの保健師が外国人への保健福祉活動経験がある現状が明らかになった。外国人に対する対応・支援を行うために今後の対策が必要と考えている保健師が多く、保健師のスキルアップのための支援や職場全体としての組織的支援が必要であるものと思われた。住民登録がなかったり、分娩病院がないなど、外国人特有の問題があり、対策が急務であると考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

①Kozuki H., Kawaguchi Y., Takaki Y., Kubo Y., Maeno Y., Nomoto Y., Miura A. and Uemoto M.: Actual Situation of providing nursing to foreign patients in hospitals in Japan, The Third World Congress of Cultural Psychiatry, Queen Mary University of London, London, UK, 2012

年3月9日

②高木幸子、久保陽子、前野有佳里、野元由美、川口貞親: 日本の病院における外国人入院患者への看護の現状に関する調査—看護場面での困難の状況、第18回多文化間精神医学会、トラストシティカンファレンス丸の内、東京、2011年10月1日

③前野有佳里、高木幸子、久保陽子、野元由美、川口貞親: 日本の病院における外国人入院患者への看護の現状に関する調査—対応方法の現状と問題点、第18回多文化間精神医学会、トラストシティカンファレンス丸の内、東京、2011年10月1日

④野元由美、高木幸子、前野有佳里、久保陽子、川口貞親: 日本の病院における外国人入院患者への看護の現状に関する調査—困難事例の分析、第18回多文化間精神医学会、トラストシティカンファレンス丸の内、東京、2011年10月1日

⑤久保陽子、高木幸子、前野有佳里、野元由美、川口貞親: 日本の病院における救急外来での外国人患者への看護の現状、第18回多文化間精神医学会、トラストシティカンファレンス丸の内、東京、2011年10月1日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川口 貞親 (KAWAGUCHI YOSHICHIKA)
産業医科大学・産業保健学部・教授
研究者番号: 00295776

(2) 研究分担者

植本 雅治 (UEMOTO MASAHARU)
神戸市看護大学・看護学部・教授
研究者番号: 90176644

岩本 操 (IWAMOTO MISAU)
武蔵野大学・人間関係学部・准教授
研究者番号: 30326962

(3) 連携研究者

瀧尻 明子 (TAKIJIRI HARUKO)
関西青少年サナトリウム・看護師
研究者番号: 70382249

平野 裕子 (HIRANO YUKO)
長崎大学・医歯薬学総合研究科・教授
研究者番号：50294989

渡辺 恭子 (WATANABE KYOKO)
日本赤十字広島看護大学・看護学部・講師
研究者番号：80352011

前野 有佳里 (MAENO YUKARI)
九州大学・医学部・講師
研究者番号：20432908

野元 由美 (NOMOTO YUMI)
産業医科大学・産業保健学部・講師
研究者番号：90280255

久保 陽子 (KUBO YOKO)
産業医科大学・産業保健学部・助教
研究者番号：90412668

高木 幸子 (TAKAKI SACHIKO)
国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 自殺予防総合対策センター・研究生
研究者番号：50515591